日本－モンゴル（自分の顔を見る）辞典（トリ）

B.ツェンドドー
（訳）大東　亮

翻訳者による前書き

日本人とモンゴル人の交流が深まるにつれ、当初「日本人とモンゴル人はよく似ている」と思っていたのが、実は「全く異なる考え方をしている」ことに気付いた人は多くいると思う。

本稿ではモンゴルの有名な著述家であるツェンドドー氏の書いた新聞記事「日本とモンゴル（自分の顔を見る）辞典（Yapon-Mongol（nuuree hardag）toli）」を翻訳して紹介する。記事では日本人を比較対象とすることで、一般のモンゴル人がわざわざ口に出して説明することがないようなモンゴル人の気質、ものの考え方の一端が表わされている。

ビャンバジャブ・ツェンドドー（Byambajav TSENDDOO）氏は1962年モンゴル国ザブハン県生まれ、1985年にモンゴル国立大学ジャーナリスト学科卒業後、人民革命党機関紙「ウネン（真実）」紙記者、「ウグ（言葉）」紙編集長、国家大会議報道部長、「政府広報」紙編集長などを務めた。日本では「風刺作家」と紹介されたことがある（山本裕子「B.ツェンドドーに見る現代モンゴル―『政治の333オニゴー』より 作品論編」『モンゴル研究』2002年、「モンゴル笑いの文学への誘い　ツェンドドー『オニゴー』」『モンゴル文学への誘い』2003年）が、現在はより広い歴史的・文化的観点から「現代モンゴル人論」と呼べるような大著を発表している（『文明の道にて　モンゴル文化年鑑（*Irgenshiliin zamd Mongoliin soyoliin almanakh*）』2015年、『文化の躍進　羊飼いから建設労働者へ（*Soyoliin dovtolgoo Khonichinoos barilgachin*）』2015年など）。

ここに紹介する小文は彼が不定期にコラムを発表しているモンゴルでは著名なウェブサイトであるbaabar.mnに2016年11月30日に掲載され、その後、12月8日に*Udriin sonin*（*Daily News*）のサイトに転載されたものである。訳者は2016年秋に来日したツェンドドー氏と数日間を共に過ごし、その独特な視点とウィットに富んだ語り口に強い印象を受けた。本人が「自分の書く文章は特徴的表現があるので翻訳しにくいらしい」というとおり、一読してわかりやすい文章とは言えないが、一方で、モンゴルをよく知る日本人であれば、なるほどと思えるところもあるだろう。個性的な比喩や、理解の前提とされるモンゴルの事情については下線を引いて、ツェンドドー氏本人による簡単な解説を加えて訳出した。日本とモンゴルの交流に際し、モンゴル人のものの考え方に関心を持つ方に参考となればと思う。

日本－モンゴル（自分の顔を見る）辞典（トリ）　　B.ツェンドドー（B.Tsenddoo）

《解説》 モンゴル語toli（トリ）は「辞典」と「鏡」という二つの意味を持ち、ここではダブルミーニングで使われている。

「モンゴルの今日の政治状況は
人類史における最高に価値ある教養の授業のひとつである。
だが残念なのは、私たちがその授業の受講生でなく、教材であることだ」

1.日本人は時間（ツァグ）を守る。モンゴル人は時計（ツァグ）を身に付ける。両方とも等しく、時（ツァグ）を利用する。

モンゴル人の生活のリズムは、人よりも自然や気象に左右される。そのため、冬営地・秋営地から移動すると決めた日は、雪が解けて人や家畜の飲料が不足したり、さらに雪が降ったり、早く寒気が訪れたりなどの理由により常に変更される。だから、時に関する全く異なる感覚やものさしが必要となる。

《解説》 遊牧民は川や水源から遠い高山の麓に冬営地を設ける。その際、雪や氷を溶かして飲食に用いる。家畜は雪を食べることで水分を補給する。春になり雪が解けてくると、人も家畜も水を利用することができなくなるので、春営地に移動しなければならなくなる。

遊牧民であった私たちの祖先が、時間を約束することを「仕事に害をもたらす」として忌避してきたのはこのような理由による。約束する代わりに「そのうちに会おう」「機会があったらやろう」「寒くなったら移動する」などのような大まかな予定や方針のみを口に出すようになった。そもそも信仰や象徴・忌避に関する儀礼も多くはプラグマティックな生活に沿った形で定められる伝統であった。つまり生活に合致しないこと、可能でないのに約束や時間を指定することをあたかも悪行のように忌避してきたようなのだ。占星術においてさえ、いろいろな「抜け道」を用意して、生活に合致させるような様々な「解決法」を用意した。例えば、旅立ちに望ましくないとされた日に天候が良好であれば「吉方を決める」儀礼を行なうことによって出立した。

《解説》 モンゴルの占星術では「移動に望ましくない日」「行方不明になった家畜を探すのに望ましくない日」など、日々の牧畜生活を滞らせるような指示が出されることが多くある。例えば、そろそろ飲料水が乏しくなり移動したくなったが、何日も「移動

してはいけない、移動したら害悪がおとずれる」と占星術で指示されたらどうするか。経典を読んだり、簡単な儀礼を行なうことで、それを解消してしまうのである。自然の強い支配下にある人々は、「占星術」でさえも修正して、実生活の方に寄せてしまうのである。

一方で時計を身に付けてお洒落するのは次のような理由による。遊牧生活では人の性質を判断することが難しい。一年のうちに会う機会は少なく、たまさか近くにゲルを建てたとしても数か月後には去っていく生活では、人の美点のみを見て付き合うことが可能となる。ところが人間の隠れた本性は長い時間を共に過ごしてこそ知りうるものである。

遊牧生活においては共同してビジネスを発展させようという機会はない。数世帯が家畜群を合わせて共同で管理するならば、牧地が足りなくなり、結句、別れるにいたる。それに対して、定住民は財産を足し合わせることによって、より幅広いビジネスを行なうことができる。遊牧民が家畜の群れを他の群れと混ぜてしまっては、自分の家畜の「顔を峻別」することができず、かえってそれを逸失することにもなるかもしれない。定住民が財産を足し合わせることで富を産む場合があるとすれば、遊牧民は家畜を合わせることで家畜を減らしてしまう場合もあるのだ。

遊牧生活の特徴である、一時的な付き合いには良い面も悪い面もある。良い面は、お互いに相手に対してよい印象を抱いたままで過ごすため、さながら極楽浄土の風情で生涯を終えることができる。だが、己の欠点を一時的に隠す術を身に付けるだけで、根本的かつ永続的に己れを律することを学ばない。また自分の利益と公共の利益との関係を如何に適切に保つかに対する経験を積むことが欠如するようである。

《解説》 遊牧民はお互いに干渉することなく自立して生活しているから、他者と適応して生活したり、誰かに許しを請うたり、自ら誤りを認める能力に乏しい。だから、人に合わせることができない頑固な人間が、絶えず人と言い争いや衝突ばかりしていては社会から疎外されることを理解しない。友好的であろうとすることすら望まない。そもそも別々の山の麓で孤高に生活する人々にとって誰かを疎外する意識がない。たまさか遭遇することがあっても、一時的に相手に合わせるふりをして、やがて別々になるだけだから。ほんの数日間だけ「隣人」となる人々にとって、悪い性格を隠して笑いながら別れることは可能なのだ。モンゴル人は何百年もこのように生きてきたので、今日、都市生活を営むことは容易ではない。都会で隣り合って暮らすと、最初の一か月はやさしく友好的な顔を見せているが、おそらく一年間続くことはないだろう。そのうちに言い争いが始まり、自分の野心を隠さなくなる。

会ったことのない人はもとより、隣家の人でさえも深く知り尽くすことができないので、表面的に判断するほかない。モンゴル人は未知の協力者を選ぶ際の基準として、「目に温かい人」という表現をよく用いる。相手によい印象を与えるためには自分を「目に温かい人」に見せる必要が生じる。目に温かくなるためには、見栄えをよくする必要がある。見栄えをよくするといっても、機会と効用の間には矛盾が生じる。ナーダム祭に立派な馬に絹衣で現れた者は「ナーダム祭に立派な馬と絹衣で来た者」に過ぎず、その背後に何頭の家畜を持っているか、金銀財宝を持っているかは語られない。まさか宴に参加するのに財宝箱を持って羊の群れを追ってくるでもないわけで。

モンゴル人が自分の収入に見合わないようなお洒落をするのは、それが自らのCV（プロフィール）、「証明書」となって、就職するときに必要なエントリーシートとなるから。時間を守るよりも、時計（ツァグ）を身に付けるほうが、周りに印象を与えるのである。

2. 日本人は表面を維持し内容を新しくする。モンゴル人は内容を維持し表面を新しくする。両者とも新しもの好きである。

長崎県壱岐市の壱岐国博物館には大陸の商人が島を訪れているジオラマ模型がある。郷土史家でボランティア解説者の山西實先生によれば「裸足なのが島人、履物を履いているのが大陸から来た商人」であるという。

朝鮮半島から小舟にのった商人が到来した時から数百年が経った。日本人は今やいくつもの靴を用途に合わせて履き替えるようになったが、家に上がるときに「裸足」であることには変わりはない。そしてかつて履物を履いて来た大陸人よりもずっと発展している。日本人は日本としての表面を維持しながら、その内容を常に新しくして、他者の文化を浸透させる。表面的には数百年の伝統を持つ相撲・着物、しかし内容的にはソニー・トヨタ・三菱・・・。

一方で、大陸の厳しい気候の中で暮らす草原の遊牧民は逆であり、ただ表面的に新しくすることを好む。冬の三か月はイヌイットのように、灼熱の夏にはアラブの砂漠の民ベドウィンのように変化する。凍えたり暑さに苦しむ問題を全面的に解決することを急がない。そもそもできるはずもない。暖かい固定家屋や冬のビニールハウスや冷房の効くマンションを思いつく能力がないのではなく、すべてを草原に捨て置いて移動するのであるから、余計なことに頭を悩ますことがないのである。

であるから、遊牧民の生活経営は表面的な改革を行なう方向で発展してきた。内側に毛を張った民族衣装（デール）を着れば「冬の人」、薄手の晴着を着れば「夏の人」、チベット族のように片袖を脱ぐようにして着れば「季節の変わり目の人」となる。20世紀には信仰さえも脱ぎ捨てて「無宗教の社会主義者」になったことさえある。

《解説》 遊牧民は物事に極めて速く、しかし表面的に適応する。例えば、遊牧民は冬の備えとして干し草や薪を大量に備蓄したりしない。「まあなんとかなるだろう」と考えるのだ。冬を越えるため何かを準備する代わりに、衣装箱から冬の民族衣装（デール）を取り出して着ることで事足りるとする。夏も同じように薄い衣装を着るだけ。春秋には冬の衣装を着て、暑ければ片袖を脱いで涼を取り、寒ければ改めて着ればよいと考えるのだ。

現在、民主主義や市場経済の季節に合わせた衣装を着ているようである。でも中身が遊牧民であることに変わりはない。

3. 日本人は着手した仕事の結果を待つ忍耐力を持つ。モンゴル人は堪えて乗り越え、歯を食いしばって物事を終わらせる忍耐力を持つ。両者とも忍耐力を持っている。

遊牧民の家畜は自ら繁殖する。持ち主はその安全と繁殖環境を整える義務を負う。遊牧生活のマネジメントは、家畜の繁殖を妨げる雪害・干害などの気候変動問題の克服に向けられる。モンゴル人の商才は幾千年もの間、ずっとこのことに向けられてきた。私たちの仕事の経験・哲学といえば、どうにかして終わらせることが重要で、どんな質で終わらせるかということは重要ではない。

日本人が建物を建てるときは、思った通りに完工し、そのことに喜びを感じる。いっぽうで遊牧民にとっては、何はともあれ、建物を建て終えること、その仕事自体を終わらせることこそが重要なのである。何かを終わらせるためなら、どんな苦しみさえも耐えられる。あらゆる忍耐力をただ「終わらせる」ことに向ける。自然は彼らに「今日の吹雪をどうにかして乗り越えろ。明日になればまた太陽が輝く日が待っている」と囁き続けてきた。モンゴルの金言「仕事するなら終わりまで」は、質や心の籠った労働の成果を見ることよりは、なんとか耐え抜いて終結を迎えるのを良とすることを意味する。

どんな雪害・干害でさえも克服する自信と努力で、ある朝、私たちは共産主義さえも終わらせたのだから。今や、私たちの潜在意識は、どうにかしてこの民主主義・市場経済というやつを後にして先に進もうと思っている。今日の私たちの最大の力、そして最大の悩みがここにあるのだ。

《解説》 モンゴル人をよく知る人なら理解できるかもしれないが、モンゴル人は何かをどうにかしてやりすごすことを考える性質を持つ。植樹を例に挙げてみよう。日本人であれば、苗木を植えて、育てて、それが実るまでを全体的に想定する。私たちには「木が育つかどうかはわからない、ともかく植えた」ということが重要なのだ。「植樹

を終えた（育つかどうかは構わない）。やれやれ、先に進もう」。かつての共産主義体制の暴力や粛清も同じように耐えて乗り越えてきた。良いことも悪いこともすべては過ぎ去る。諸行無常。仏教哲学の教えでもある。そして今、「市場経済」や「民主主義」に対しても、そのように向きあっている。遊牧民の性格では「民主化？　市場経済化？　またいつか終わるときがくるかもしれない。ともかく降りかかる困苦をやりすごして生き残ること、先に進むこと」を考えている人が多いのではないか。

4. 日本人は誰かが切り拓いた道に沿って前進することを好む。モンゴル人は横並びで前進することを好む。両者とも前進することを望んでいる。

草原における自由の保証は勢力の均衡にある。家畜群やその他の要因により他者を圧倒する能力を持たないことにより、お互いが自由に移動することが可能になる。

しかし、ひとりが勢力を拡大することは、平和の均衡を壊し、他者を支配し、よい牧地を奪うことに通ずる。その意味で、誰かが抜きんでて力を持つことを敏感に警戒する。富や勢力を手にした者を見た天の守護尊は、モンゴル人の耳もとで「仔羊の毛が落ちた、二歳羊はよく育った（『モンゴル秘史』第七九節）」と囁く。この傾向は今でも変わらずあり、うまくやっている人の足を引っ張る「地獄の窯の物語」に、私たちは常に喩えられる。定住民のビジネスモデルが、ある成功者の後に続いて全体が潤い成長する傾向があるとすると、草原では逆なのである。

《解説》　モンゴル国で普及しているTs.ダムディンスレン版*Mongoliin Nuuts Tovchoo*（モンゴル秘史）からの引用。日本語で出版されている原典からの訳は、「野かけ（の雛ども）が幼羽を脱ぎ落したぞ　涎たらし（の小羊ども）が　大人となったぞ」（村上正二訳『モンゴル秘史』1，東洋文庫）、「小羊どもが　脱毛せり　涎垂らしどもの涎とまれり」（小澤重男訳『元朝秘史』（上），岩波文庫）など。いずれも「まだ幼く無力だった者が成長し、復讐する能力を持つ強敵となったことを警戒せよ」という譬え。「さらに強くなる前に叩け」を含意する。

この傾向には良い面と悪い面がある。悪い面は、成功者を崩壊させようと企図すること、共に幅広いビジネスを発展させることを妨げることである。一方で、過度に資金が集中する寡頭体制の台頭を予防する面もあるように思える。

5. 日本人は赤字の予防に腐心し、所得を重視する。モンゴル人は災失（ガルズ）を畏れ、恵得（オルズ）を尊ぶ。両者とも財産を常に殖やすことを望む。

《解説》「災失（ガルズ）」とは人間の活動に関わりなく生ずる喪失である。突如発生するゾド（雪害・寒害）により、全ての家畜を失うこともある。この喪失を防ぐ手段はほぼない。「恵得（オルズ）」とは人間の労働・努力に関わらず得られる財産。地下に埋まっている金を発見するとか、宝くじで百万ドルが当たるなどである。「恵得（オルズ）」は、それを得ようと企図したり、そのためにがんばって働くことで獲得できるものではない。一方で「赤字」とは、当人の無責任や、ビジネス企画の失敗などを理由として生じる被害で、それは防止することが可能である。「所得」とは計画して労働することで得ることのできる収益のこと。チンギスハーンが分け与えた戦利品、ソ連の援助、IMFや日本政府の支援、つい先頃、我が国政府が国民にばら撒いた「鉱山の恩恵手当」「結婚手当」などはみな「恵得（オルズ）」である。私たちはおよそ一千年の間、「恵得（オルズ）」によって生きてきた。一方で、トヨタ自動車が製造した車を売って得られるのは「恵得（オルズ）」ではなく所得であり利益である。このように喩えてみると、日本人すなわち定住民は自ら運命の舵を取って富を創造し、遊牧民すなわちモンゴル人は天（テンゲル）の神様（ボルハン）すなわち運に任せて生きてきたともいえる。

遊牧民にとって家畜群の繁殖と亡失以外に、安定収入や常時の赤字リスクなどを理解させるビジネスの学校はなかった。家畜群は天候によって一気に増えることもあれば、全てが失われてしまうこともある。

遠征による戦勝、そして首尾よくいった狩猟による獲得物には際限はない。だから持てるだけを持っていく。得られる量以外には制限はないから、収穫に制限を設ける感性は育たない。時間をかけて徐々に裕福になる継続的かつ安定的収入や、気が付いたら空っぽになっているような継続的赤字についての経済的感性も育たずにきた。そんなことから、これまでモンゴル人とつきあってきた人々は、その「際限のない野心と抑えきれない欲望」に驚くことになる。

《解説》 モンゴル人は自分の野心を制御する能力に乏しいようで、誰しもが「運がよければチンギスハーンになってやる」という野心を持っている。個人のみならず国家としても驚くべき楽天的な夢を抱いているのであるが、自らの可能性を正しく把握し対策をとる計画性がないことは、すでによく知られている。

この性質も良い面と悪い面がある。悪い面は、所得や利益の適切な水準がわからないことにより、過度な取り分を要求し、却って多くの安定的な収入源を閉ざしてしまうことである。またモンゴル人が天井知らずの欲深であるかのように見られてしまうことである。良い面は、この抑えきれない欲望と尽きることのない好奇心が、一部の大富豪がメディアや社会的影響力を持つ何らかの媒体を買い占めてしまうことを、わずかながら抑止していることと言える。

《解説》 ここでの喩えは、特にメディアを巡る状況でよく見られる。寡頭富豪（オリガルヒ）はメディアに対して金を支払い、メディアはもらった金を浪費して、また請求する。金がばら撒かれていることを知った別の者が新たな新聞を出版し、「ほかの奴に支払っている金を俺にくれ」と言う。この金の背後に契約や合意があるとはみなさず、これも単なる「恵得（オルズ）」と見なすのである。「恵得（オルズ）」にはきりがないことは上述した。喩えるなら宝くじで百万ドル当たった人が「私には百万ドルは多すぎるので、五十万ドルでいい」とは言わないだろう。あるいは二人のモンゴル人が共謀して国の金を横領したとしよう。ひとりの得た金がもうひとりの得た金より少なければ、少なく得たほうは多くを得た者の証拠を持って新聞社に駆け込むのだ。こうして「抑えきれない欲望」のために犯罪が明るみに出て、正義が実行されるというわけ。

6. 日本人は信じやすいが二度はだまされない。モンゴル人は人を信じないが何度もだまされることがある。

日本人は人の信頼を失うことを怖れる。それはモンゴル人が家畜を失うことを怖れるのと同じ。だから他人を信じやすい。しかし一度相手に対する信頼を失くしたならば二度と再び信じることはない、そしてもう騙されまいと警戒する。

モンゴル人はもともと疑い深く、信じる前に疑う。しかしその疑い方が極めて無邪気なため、覆すのも容易い。テーマを変えて騙れば、ひとりの者を何度も、あるいはひとりの者が別の者を何度もだますことができる。

《解説》 モンゴル人の疑り深さは特徴的である。最初は奇怪なまでに疑いをかける。何年か前に「日本人は島が沈むかと思って我が国を狙っている」「『北国の春』の北国とはモンゴルのことだ」などというまるで正気とは思えないような論さえあった。ところが、その疑り深さは慎重さとはまったく結びつかない。今日、G-Timeと呼ばれるネットワークビジネス（マルチ商法）に多くの人が騙されている。「所得」を得るために汗を流して働くよりも、一気に「恵得（オルズ）」を獲得する方向に靡く。信じるべきものを信

じないくせに、信じるべきでないものを信じる国民性なのだ。

常時戦いに明け暮れていた草原の戦闘移動民はとても敏感で、カモシカのように驚きやすい。同時に、驚かせたものに危険がないと思うやすぐに安心しきって、挙句野獣に捕われてしまうところも、まるでカモシカのように邪気がない。

遊牧民は情報体系のない環境で何百年も生きてきたので、相反する情報を分析する経験に乏しい。一方的な情報に偏る社会主義時代に文明化の道を進めたことが、より歪んだ伝統を残した。メディアや公式情報を信じるよりも、口伝えの言葉に意義を認めるようになったのだ。

もしテレビが「貴方のお金を銀行が安定的に預かります」と言っていれば、宣伝放送だと見る。しかし、知り合いの誰かが「このネットワークビジネスは儲かるらしい」と言えば、すぐに信じて「本当に儲かるらしいぞ、誰々が言っているのだから」と、財産のほとんどを詐欺師に捧げる用意がある。

日本人や経験豊富な文明国の市民は生じた事象や証拠を事実と見なす。遊牧民は自分に利益があるヴァリアントを真実として受け入れる傾向にある。

7. 日本人は嘘を言うのが嫌い。モンゴル人は本当のことを言うのが嫌い。

お互いが遠くはなれて移動生活してきた人々の間では思想を交換したり、自分の立場を表明する芸術（アート）がそれほど発展しなかったようだ。いろいろなことを思いついたりしないのかって？　思いついたところで話し相手が近くにいない。思ったことを口に出すことないまま、独りで馬をとぼとぼ歩かせているうちに無口になる。

最も激しい言い争いは「牧地の奪い合い」において起こるが、敗者は正義を追究するかわりに、別の地に移動することで問題を解決してしまう。もとより牧地の紛争を段階的に裁判で審議している間に家畜は飢え死にしてしまうではないか。定住民にとって空気や水のように必要な自由という概念は、思うままに移動して好きな場所にゲルを建てることで代替される。

モンゴル人の真実を語らない性格を最も発展させたのは社会主義の過程であった。二十世紀のモンゴル人は文明開化を始めたが、それは社会主義建設と重なった。社会主義体制における都市化は従来の文明化とは異なり、東欧のポーランド・チェコスロバキアのようなゆるい体制から北朝鮮のような厳しい体制までを含む「収容所」国家として行われた。この収容所のモンゴル人は、「自らの思想を持つこと」と「自らの思想を隠すこと」を同時に学んだ。体制のイデオロギーに合わせて「教わったことと別に考え、考えたことと別に話す」ことを習得した。昼間、職場で「神はいない。宗教は人民を惑わすアヘンである」と

語り、夜に家でそっとレーニン先生の肖像画の後ろに隠した仏様に祈る。祖先から「長い舌は首を絞める」「仔馬から落ちても死にはせぬ　大口たたけば死に至る」「最初に鳴いたカッコウの口は凍りつく」などと伝えられてきた。このような伝統は、私たちが真実を話す必要がないと見なす根拠となり、さらにひとたび真実を語らないのであるから、語ったことに従うこともないという結論に至らせたようだ。

真実を語らない特徴の中に、語るべきもうひとつのテーマがある。これも過去からの警鐘である。「愛国者」「マルクス－レーニン主義」「プロレタリア国際主義」などのイデオロギーの枷によって全てを正当化し、指導者たちが気に入らなければ誰であろうと「毛沢東主義者」「人民階級の敵」などのレッテルを張って粛清することが可能であったモンゴル人民共和国時代。今日でも犯罪的行為を「愛国」の名のもとに隠蔽し、気に入らない輩を「中国側」として社会的に差別する企図が成功しているように見えるのはこうした過去の時代の残滓である。

《解説》 今日のモンゴル国には外国の投資家に対して「環境保護」の名のもとに圧力をかけて金銭を要求する「運動」がたくさんある。それらは、この行為によって「祖国を外敵から防衛している」と説明する。

8. 日本人は「いいえ」と言いたがらない。モンゴル人も「いいえ」と言いたがらない。両者とも聞き間違いでなければ「いいえ」とは言わない。

両者とも他者を騙す目的はない。日本人は「いいえ」と言わないけれども、内心では拒絶の気持ちを自覚している。そのうえで敢えて「いいえ」と言わないことを「優しさ」と認識しているようだ。だから日本人の「いいえ」と言わない遠回しな表現はだいたいにおいて理解できる。一方でモンゴル人は「そのうちどうにかなることもある」という意味で「いいえ」と言うことを避ける。それは本心から言った「はい」と理解されることもある。モンゴル人が「はい」と言ったにもかかわらず、気が付くと姿を見せなくなった場合は、「言ったことを実現しようとしたけれども結局できなかったのだな」と理解される。

《解説》 例えば、知人である日本人のあなたに「百万円貸してくれ」と言ったとしよう。あなたは「冗談いうな、できない!」とは言わず、「えーと、あなたの考えは聞きました。あとで回答しましょう」と言う。これは「ごめんなさい、できません」という意味であると。ところが同様にモンゴル人である私が知人のモンゴル人に「百万円貸してくれ」と言われた場合、やはり「いいえ」とは言わない（言えない）。「はい（ザー）」と答える。「はい（ザー）」という発言の意味は「手立てがあればいくらかでも工面してやろう」という信

義である。その信義に基づき、知り合いに尋ねたり、なんとかしようともする。でも実現できないこともある。そして後日、「私は金を工面しようと頑張る」ことを「はい」という言葉で表明したのだが、頑張っても金は工面できなかった、だから私は悪くないし、誰も騙していないということになる。知人のモンゴル人も「こいつは自分を助けようと頑張った」と理解し、自分を騙したと怒ることはない。日本人のあなたは、金を貸すと約束したのに金が工面できなければ自分が悪いと責める。ここがモンゴル人と日本人の違いである。

結び

モンゴル人と日本人、両者とも好ましい国民である。そもそも悪い国民などあろうか。しかし文明を確立した国民と、確立しつつある国民の違いはある。ある国の国民性や本質は、通過してきた生活経験やそこで培われた道徳観念の総体として存在する。日本人とモンゴル人の両者とも善き市民であるが、それぞれの歩んできた道が、その発展の傾向を明らかにし、その傾向が特徴的な国民性を形成しているのである。

日本人は自分たちが暮らす島より他には移り住む場所はないということをずっと昔に認識したため、自分の周りの環境に合わせて利害を調整する解決策を探るほかに道がなかった。だからこそ彼らにとって公的利益というものが早くに生じ、それが共通の道徳を定義することになった。

一方で遊牧民を祖先とするモンゴル人は、問題をそこに「置いていく」ことで解決する伝統を持ち、喧嘩した人とわかりあう代わりに、別の場所に移動して離れることを選んだ。これにより自分の利益と公的利益を適切に調整する経験が育たなかった。モンゴル人は「お前がいなくてもだいじょうぶ」という規則によって、日本人は「あなたがいなければならない」という法理で躾けられたとでも言おうか。両者のずれはここより生じているのである。